

## 小豆の持つ力を信じて

北海道美瑛町 喜多順一氏インタビュー



北海道美瑛町生まれの喜多順一さん。農作業のかたわら日本拳法の指導員として町内の子どもたちなどに指導を行う格闘家の顔も持つ

北海道のほぼ中央に位置する上川郡美瑛(びえい)町は、なだらかに波打つ丘陵が続く「丘のまち」として有名です。基幹産業は畑作農業。小麦、ビート、豆類、ジャガイモが多く栽培され、豆類は大豆、小豆、手亡、中長、金時、菜豆他、青えんどう、

赤えんどう等、たくさんの種類がまちの特産物となっています。

美瑛町で農業を営んで4代目となる喜多順一さんが、第45回(平成28年度)全国豆類経営改善共励会の小豆・いんげん・落花生の部「農林水産大臣賞」を受賞されました。今回高く評価された点の一つは、平成28年が天候に恵まれなかったにもかかわらず、小豆の単収が303kgと道平均の167kgを大きく上回ったこと。その背景には喜多さんが長年積み重ねてきた適正な輪作や土づくり、適期防除などがあります。

また、2年前から「JAびえい豆作生産部会」の部会長も務め、美瑛産小豆「しゅまり」のブランド化に力を注ぐキーパーソンの一人。約65haの広大な農地で、小麦やジャガイモとともに良質な豆類を栽培する喜多さんに、お話をうかがいました。

### あんに最適、美瑛産「しゅまり」の魅力

今回、小豆の栽培で受賞できたことで、私たちJAびえい豆作生産部会が取り組む「しゅまり」のブランド化に少し貢献できたかなとうれしく思っています。自分の受賞というより、部会メンバーの活動に対す

きた じゅんいち 第45回(平成28年度)全国豆類経営改善共励会 小豆・いんげん・落花生の部「農林水産大臣賞」受賞

る受賞で、いろいろな助言をくださる方々のおかげです。

現在部会には170戸が参加し、栽培面積は豆類全体で約1,000ha、そのうち大豆が約600haと多く、小豆が約200ha、そのほか金時豆やえんどう豆などが約200haとなっています。

私たちが「しゅまり」の栽培に力を入れはじめたのは、平成15年に北海道の奨励品種として採用された数年後からです。当時、道産の小豆は「エリモショウズ」が栽培面積の約7割を占め、私も栽培していました。しかし、美瑛は小豆の一大産地である十勝産に比べて日照時間が長いため、どうしても皮の色が濃くなってしまおうのが大きな悩みでした。

その点、新しく登場した「しゅまり」は、日照時間が長く高温になる道央の気候に適していることに加え、「エリモショウズ」の大敵であるアズキ落葉病に強く、この土地にぴったりの品種だったのです。

あんにすると美しい薄紫から赤紫に仕上がりが、子実が小ぶりで皮が薄いため風味がいいことが特徴です。その後、だんだんと老舗和菓子店や製あん会社に知られるようになり、美瑛産「しゅまり」を選んでくださるようになりました。

私自身は、ゆでた「しゅまり」に少し砂糖をかけて食べるのが好きです。かつては自分の作った豆をあまり食べていなかったのですが、最近は健康面も考え、よく食べるようになりました。豆の風味が感じられて本当においしいと思います。

こんな風にいいことづくめに思える「しゅまり」ですが、けっして作りやすい品種とは言えません。今も道内で最も多く栽培されている「エリモショウズ」に比べ、主茎長が長く、つる性の特性を持つため、大きく育つと倒伏しやすいのが難点です。施肥量が少ないと主茎長が短く、どちらにしても機械での収穫が困難になります。

また開花時期の低温抵抗性が弱いため、道内での作付けは近年減少傾向となっています。しかし、だからこそ美瑛の「しゅまり」には希少価値があり、他の小豆と差別化ができることが私たちの強みでもあります。

豆作生産部会として15年近く「しゅまり」の普及に取り組むなかで、小豆研究の第一人者である加藤淳さんにお話を聞きに



明るい色合いが「しゅまり」の特徴



平成29年6月29日、東京で行われた全国豆類経営共励会の表彰式にて（写真右が喜多さん）

いたり、製あん会社へ直接営業に行ったり、いろいろなことに挑戦してきました。最近では若手会員の協力も得てWebサイトやfacebookで情報発信もしています。自分たちでできることは何でもやる。ようやくその成果が、小さなつぼみとして膨らんできたような気がしています。

### 喜多さんの豆作り

現在私の農地は水稲が13ha、残り50haほどが畑作です。美瑛の農業は畑作がメインですが、私たちの土地には沢地もあり、町内の他のところとは違い代々水稲もやっている特殊な土地柄です。畑では、「北海道の畑作四品」と言われる小麦（秋まきと春まき）、ジャガイモ、豆類、ビートを生産しています。

周辺には種子豆を作っている農家が多く、「種子生産団地」と呼ばれていて、昔から豆類の生産に適した環境なのでしょう。私は大豆の「トヨムスメ」と赤えんどうの種子豆を作っています。

いま国内で赤えんどうを作っているのは美瑛を中心とした上川地域だけで、近年は特にスイーツで人気の豆大福に使われるため、急激に需要が伸びました。

これまでも注文に応じていろいろな種子豆を栽培してきましたが、種子豆作りは責任ある重要な仕事ですから、細かいルールを守って作業にあたっています。

一般豆は、小豆の「しゅまり」を約3haと、黒大豆の「いわいくろ」を作っています。豆類の栽培は、経営面積の約2割を占める



上川地域の特産、赤えんどうの収穫は8月上旬

重要な作物。今回私が受賞したのは小豆部門ですが、審査基準の平成28年は全道的に天候に恵まれず、小豆はどこも収量が上がりにくかったようです。

そのなかで、うちの畑が高い収量を確保できたのは、そんなに特別なことはしていないのですが、畑のカルシウムを充分補充し、長年土づくりに力を入れてきたことが要因の一つかもしれません。ほぼ毎年土壌診断を行い、豆類は石灰飽和度が最低でも30%を切らないように石灰資材を投入しています。

### ときには「じっと我慢」も大切

その年の小豆の出来は、北海道では6月から7月初頭くらい、初期生育のころに勝負が決まると言われています。ビートなど他の作物は、あとから盛り返すことがあるのですが、小豆はなかなか難しく、初期生育時に低温障害を受けると葉が萎縮してしまいます。いつまで経っても苗が小さいままで、どうしようかと焦ります。

このとき、いろいろな資材を投入したく

なるものですが、私は土壌がある程度しっかりしている場合は、じっと我慢することが大切だと思っています。作物が持っている生命力を信じて、気長に構えるのが一番。我慢できずに追肥を葉面散布したりすると、その後天候が回復したときに生育が止まらなくなり、枝葉ばかりが生い茂ることになりかねません。

また、苗が弱っているときにあれこれ手をかけても、逆効果になる場合が多いと思います。大雨や洪水など大災害の場合は別ですが、作物は少しくらい踏まれても霜に当たっても、それを跳ね返す力を持っていますから、辛抱強く待つようにしています。

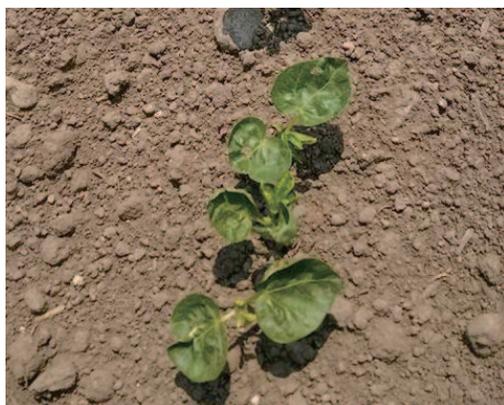
それから、広い畑で適期作業・適期防除を実践するには当然ですが日々畑を観察し、わずかな異常も見逃さないことが重要です。異常を見つけたときは自分の経験だけで判断せず、普及センターなどと連携を図り、迅速な対応を心掛けています。

昨年から豆作生産部会のFacebookに写真を投稿しているのですが、人に見せるた

めに撮影すると、これまで以上に畑をじっくり観察するようになりました。これは思わぬ収穫で、Facebookをやってよかったことの一つですね。



8月中旬、小豆の下莢肥体



6月末、低温障害を受けた後で回復を見せる小豆



10月初頭、収穫期を迎えた小豆畑

## 適正な輪作体系を守ること

畑では、30年ほど前から北海道の畑作の基本となっている「4年輪作体系」を崩さないことが大切です。うちは父親の代から輪作を導入しています。

順番としては、根物（ねもの）と上物（うわもの）を交互に栽培するのが基本。ジャガイモのあとに小麦、次がビート、最後に豆類で1サイクルとなります。

作物ごとに最適なpH値が違うため、細かい調整が必要になります。簡単に説明すると、ビートはpHが高くないと収量が増えないので、ビートの年に石灰資材を多めに投入してpHを上げておきます。次は豆類ですが、豆の年は様子をみながらほどほどにしておいて、次のジャガイモでどんと下げないようにします。ジャガイモはpHが高いと病気が出やすいのです。

また、ビートはチッ素肥料をたくさん使いますが、豆類は根粒菌が共生しているのでチッ素はあまり必要ありません。そこで、ビートを植えた後は減肥しないと豆類の枝葉が伸びすぎてしまいます。

幸いうちの畑はpHが上がり過ぎることもなく、ほどほどの状態が保たれているので、それほど苦労はしていません。先祖から受け継いだ土地に感謝ですね。

ただし自分たちではどうにもならないのが、水はけの悪い「しけた畑」です。湧き水ではないのですが、昔からよく「水が湧く」と言われ、暗渠を設置してもほとんど効果がない場所が必ずあります。排水対策としては、石礫が表層に上がらないハー

フソイラを活用するなど、できるだけ乾燥化に努めています。

## 広大な農地でドローンの活用も

父親から経営移譲した10年ほど前は農地が50haほどで、それでも町内の平均面積より大きかったのですが、その後離農地などを取得して現在の広さになりました。面積が広いことに加え、畑のある場所まで自宅から車で約15分かかるので、日々の作業の効率化・省力化は大きな課題です。

特に苦労するのは夏場の防除作業でしょうか。まずトラックに5トンの水を積んで畑に行き、一旦戻って（妻がいるときは車で、いないときは自転車で）防除機の準備をして再び畑に行き、約5haの防除作業をします。

多いときは1日で15haほど作業しますから、これを3回くり返すことになります。5ha終わるのに2~3時間かかるので、3回くり返して6~9時間。もう慣れているので平気ですが、本当に1日があっという間に過ぎてしまいます。

将来は、主に水田に空中から薬剤散布ができればと思い数年前に小型ドローンを購入しました。まだ散布に使う段階ではありませんが、操縦を練習したり、写真を撮ったりしています。春先は畑の雪だけ状況を確認するのもいいと思います。新しい技術や装置も、無理のない範囲で導入していきたいですね。

でもドローンの操縦などは私よりスマホ世代の若者のほうがずっと上手ですから、



広大な畑での播種作業



農薬散布は最低限に抑えて適切な時期に実施

これから若い人たちにぜひがんばってもらいたいと思っています。

### 若い人たちに恩返しをサポートを

私は短大で農業について学んだあと、昭和62年に就農しました。若いころは外に出てみたいという気持ちがあり、農閑期の冬に約半年間、2回ほど海外研修に行きました。

最初はアメリカで、切り花販売の会社にお世話になりました。直接農業には関係がありませんが、アメリカにトヨタや日産のショールームが普通にあり、日本製品を作る工場がたくさんあって、すごく衝撃を受けたのをよく覚えています。

日本の種苗メーカーがアメリカに店を構えて種子供給をしていたり、逆に日本向けにカリフォルニア米を栽培する農場があっ

たり、世界と日本がさまざまな場面につながっていることを実感しました。

次の研修先は、夏の時期を経験してみたかったので、南半球のニュージーランドを選びました。畑作に合わせて牛と鹿の牧場を営む農場に受け入れてもらい、循環型農業の現場を経験することができました。

こうした経験をするうちに、「いつか自分も恩返しをしたい」とおぼろげに思うようになりました。数年前から「NPO法人日本青年海外派遣センター」の理事として、日本の若者の海外研修のサポートと、海外の研修生受け入れ活動を続けています。

うちの農場には、これまでにブラジルと韓国から将来農業経営者を目指す若者が研修に来て一生懸命がんばっていました。みんな目的意識が明確でやる気にあふれているので、たいへんなことも多いのですが、見ていて気持ちがいいです。

また、自分の母校からも毎年夏に学生2人が研修に来て、家族と寝起きをともにしながら作業をしていきます。ここでどれくらいの技術や知識が身につくか分かりませんが、お役に立てることは何でもしたいと思っています。これまで私がいろいろな場所で、たくさんの人に受け入れてもらったように。それが将来につながっていくことになればうれしいと思います。

・JAびえい豆作生産部会のサイト

<http://bieibeans.web.fc2.com/>

・JAびえい豆作生産部会のfacebook

<https://www.facebook.com/biei.beans/>